

卷 頭 言 — 機器の目・人の眼 —

昨年末以来、徳島県の観音寺遺跡から出土した木簡の釈読に従事している。奈良県南部の高取町に住んでいるので、大阪に出て飛行機かJRで、今年四月に明石海峡大橋が開通してからは、高速バスを利用して、徳島県板野郡上板町に所在する徳島県埋蔵文化財センターにうかがい、木簡の釈読作業をしている。徳島行きは、もう七、八回にもなるだろうか。行く度に二、三泊して集中的に作業をするが、釈読の難しい木簡が多く、なかなか作業が捗らない。

水を張った容器に木簡を入れ、まず木簡に附着した泥を丁寧にとす。細い軟らかな筆で、時には太い筆、堅い筆を用いて作業をする。墨痕を筆で擦ることは、勿論、避ける。小さな石や砂が食い込んでいる場合は、千枚通しを横に寝かせて慎重に取り除く。その作業を終えてから、墨痕を追い、筆跡をたどってゆく。表面が腐蝕していたり、墨痕の薄いことがほとんどだから、筆跡を追うことは難しい。木簡が折れていたり、縦に半裁されている場合は、尚更である。水中で木簡の角度をいろいろに変え、また照明を様々に変化させ、各種のルーペを用いて筆跡を追う。時には木簡を水中から取り上げ、表面を少しずつ乾かしながら読むこともある。こうした作業を長時間続けていると、墨痕の有無や筆の運びのあれこれが頭の中にたたき込まれてゆく。そしてある瞬間に筆の運びがわかる。筆跡が完全にわかるということは、即ち文字が読めたということなのである。ここまでの作業を時間をかけて行なう。その後、赤外線テレビで、もう一度筆跡を確認してゆく。注意しなければならないのは、赤外線を当てる角度やその強弱で、傷の部分やケバだっている箇所が墨痕のようにみえることである。最初に自分の眼で、徹底して木簡を観察し、墨痕を追っておくと、こうした墨痕でないものは容易に見分けがつく。木簡の表面が黒ずんでいたり、腐蝕が甚だしい場合、あるいは墨痕が薄くなっている時、赤外線テレビの効果は絶大である。しかしこれまでの経験か

らすると、機器の目よりも人間の眼の方がはるかに優秀である。徹底して眼で読み込むことこそ肝要である。

一つの木簡の釈読に数日を要することもある。このように読めると判断する先に、こうは読めないと思極めることが難しい。そうした見極めを重ねて、初めてこう読めると判断できるのである。しかし一人で木簡を釈読することは難しい。こう読めると判断しても、日を改めて別な条件で作業すると、違った筆跡に見えてくる場合もある。複数の眼が必要である。数人で釈読作業ができるのであれば、理想的である。その意味で、今回の観音寺遺跡出土の木簡について、徳島県埋蔵文化財センターの御配慮で、七月二十六日、同センターで木簡検討会を開催していただけたのは寔に有り難いことであった。六月五・六日に長野県立歴史館で行なわれた長野特別研究集会や今回の観音寺遺跡の木簡検討会のように、木簡の出土地で、会員のみならず、会員外の木簡に関心をもつ若い人達にも参加してもらって、木簡を検討する機会をもっと増やせたら、と思う。

話はかわるが、先日、こんなことがあった。今夏、昭和四十三年度に奈良県教育委員会が行なった藤原宮跡の発掘調査で出土した木簡を三十年ぶりで再読した。木簡の保存状態はよく、当時とほとんど変わらない。鶴見泰寿氏と二人で、時間をかけて釈読したが、前回より僅かに数文字を新たに読みとれたに過ぎなかった。最後に赤外線テレビで確認しようということになり、少し休息をとった。その間、木簡を水中から取り上げ、雑談しながらもなお筆跡を追い続けていたところ、表面が適度に乾いたからであろうか、木簡を斜めにすると、突然、筆跡が見えだした。墨痕はないが、廃棄された当初、しばらく地表に放置されていたらしく、表面が微かに盛り上がっていたのである。それに気付くと、次々に読み進めることができた。本号の一九七七年以前出土の木簡の藤原宮の木簡(1)の釈文がそれである。三十年前には釈読できなかった部分が、水が日差しを浴びて溶けてゆくように、読むことができる。久しぶりに興奮した。木簡釈読の醍醐味であろう。改めて赤外線テレビで見ると、その部分はまったく墨痕が映らない。人の眼の確かさと、木簡釈読の難しさを思い知った次第である。(和田 萃)